

エッセイ特集1

聖人伝と暴露文書の間で——ヴィクトリア時代の〈伝記〉

悲しみの手記を共有する
——家族のメモワールと感情労働——

山口 みどり

癌で亡くなった元女性アナウンサーが闘病中に発表したブログが話題を呼んでいる。「可哀そう」な人生ではなく、「色どり豊かな人生」にしたいという彼女の言葉は共感を呼び、彼女は海を超えてBBCの「女性100人」にも選ばれた。¹ 献身的に妻を支えた夫の歌舞伎俳優も、夫として父としての目線から家族の様子を発信し、それは妻の死後も続いている。私生活をも「舞台」とし、創出したパブリック・イメージに沿った生活を演出することで感情をコントロールし、読者の共感を力に立ち上がろうとするのだろうか。

ふたりのブログは、ヴィクトリア期のある一家を思い起こさせた。1856年春、カーライル大聖堂主席司祭であったアーチボルト・テイト師(1811-82)は、わずか6週間のうちに幼い娘5人を猩紅熱で次々に失うという悲劇に見舞われた。悲報はヴィクトリア女王の耳にも届き、その声掛かりでテイト師はこの後すぐに45歳の若さでロンドン主教に大抜擢された。さらに12年後、テイト師はカンタベリー大主教の座に上り詰めることになる。

5人目の犠牲者を葬った数日後、テイト夫人キャサリン(1819-78)は娘たちの思い出の手記を書き始めた。139頁におよぶ手記は、主席司祭館の幸せな日常生活から始まる。一家の幸せは2月に六女が誕生したことで頂点に達するが、わずか半月後に一転する。子どもたちが次々に猩紅熱に倒れ、神の下に召されるのである。家族の最期を記録することは福音主義によって流行し、1870年代ごろまで多くの家族で見られた。それは一種の宗教的行為であったが、同時に家族の記憶をとどめる手段でもあり、書き手の癒しの行為でもあった。「祝福された5人の小さな娘たち」の姿と共に、「苦

悩のうちにではあるが、祈りと感謝と共に」娘たちを手放す夫妻の姿を描くキャサリン・テイトの手記は、その模範例だといわれる。²

実はこのときカーライル主席司祭館の悲劇を記録したのは、テイト夫人だけではなく。夫も、またテイト夫人のお産に駆けつけ悲劇を間近で目撃した親族の女性たちもその様子を書き留めており、後年、テイト師の下には子どもたちの死を記録する「たくさんの手紙と、一部始終を著したもの」がもう2,3点集まったという。³ 例えばランベス宮図書館には、テイト夫人の姉エリザベスが一族の子どもたちに伝えるために記録した手稿が収められている。「人生は不確かなもので、老人にも幼子にも死は同じように身近なもの……子ども部屋の棚にはおもちゃがいっぱいだが、それを取り出して遊ぶ小さな手はもうない」と始まるエリザベスの手記には、この時期特有の福音主義的な死生観が表れている。⁴ テイト師の姉レディ・ウェイクも「灯りを消した部屋で天と地が邂逅したあの厳粛な時」を記録したことを告げ、「あの死にゆく子どもたちと、辛い試練にあったその両親以上に神の栄光を称えた者はいない」と弟夫婦を称えている。⁵ 衝撃的な体験をした彼女たちは、今のわれわれがブログやフェイスブックに投稿するように、体験をシェアせずにはいられなかったのかもしれない。

しかし、ある親族の女性が病の現場から実家へ宛てた手紙では、苦しみのなかで神を疑うテイト夫妻の姿が伝えられていたという。⁶ レディ・ウェイクの手紙にも意味深な一節がある——「階下で聞かれたのは、わが意志ではなく、神の御心がなされんことをという声^{だけ}でした〔傍点筆者〕」。⁷

テイト夫人の手記の行間から見えてくるのは、手伝いに訪れた親族や召使い、大聖堂の聖職者たちに見守られる病室が、聖職者の家族ならではの残酷な感情労働の場でもあったことである。夫妻の願いむなく子どもたちは次々に病に感染していき、夫妻は神が一人残らずわが子を召されるつもりかと戦慄する。幼い娘たちは、教えられていたままに神の下へ旅立つ喜びを口にして夫妻をさらに苦しめる。しかし、すべてを神の意志に委ねる姿を見せることこそが、彼らの使命なのである。とりわけ痛ましいのは、4人目の犠牲者であり夫の「最も大事な宝」であった十歳の長女の死のシーンであろう。長女の闘病はちょうど復活祭と重なっており、テイト師は「復活祭が希望をもたらすという希望になおもすがっていた」。ところがカー

ライル中の教会で娘のために祈りが捧げられたにもかかわらず、長女の病状はますます悪化し、復活祭当日には次女までが病に倒れて夫妻を絶望の淵に追い込むのである。ついにテイト師は、長女の床の周りに集まり涙を流す家族・親族・召使いら「全員の前で、『神の御心がなされんことを』と言って跪き、娘を捧げなければならなかった〔傍点筆者〕」。⁸

テイト夫人にとって、この手記は、こうしたなかで自分の感情を求められる役割に落とし込み、家族や友人と「シェア」し、共感を受けながら管理していく一手段でもあったのではないだろうか。執筆前に、彼女は友人にこう書き送っている。

機会があればあの子たちの立派な最期の様子をお伝えします。心を揺さぶる内容ですが、お心に適うかと存じます。あの子たちはクリスチャンとして生き、クリスチャンとして死んだのです。これ以上何を求めることができますか？ ですが寂しくて、ぽっかり穴が開いたようで、答えは見つからないのです。⁹

実際、テイト夫人は書き終えた手記をまず友人や親族に見せている。親しい友からの共感と承認は、自らの深層感情の管理に役立ったのだろう。翌年になって、夫人は初めて夫に「あの手記」を読んで聞かせ、夫もそこから慰めを得たことを友人に報告している。悲しみの手記を共有することで読み手もまた癒されることを、テイト夫人は学んだのだ。後年、彼女は「同様の重荷を負った人びとの助け、慰めとなるように」、夫妻の死後に手記を出版することを息子に託している。¹⁰

一方、テイト師の感情との向き合い方は対照的であった。テイト師も執筆を感情の整理の手段としたが、それはあくまでも自分の心を精査する宗教的行いであり、人目に触れさせることはなかったようである。彼は二人目の犠牲者を見送った後、渦中で死の記録を始めたがすぐに断念し、病魔が去った後もなかなかペンを執る気力を持たなかった。ようやく一月後に記載した日記にも、煩悶しながらも気持ちを立て直そうとするテイト師の様子が浮かび上がる。「神よ、汝の御業は謎です。われわれは深い淵を歩んでおり、足元もおぼつかないのです。……汝が我々の命を奪っても、私

たちは汝を信じ続けます」。¹¹

9月半ば、主教の座の打診にテイト夫妻はようやく迷いを抜ける確かなきっかけを掴んだ。娘たちの死を、そのために課せられた大いなる試練と捉えたのだ。テイト師はその日の日記にこう書き記した。「このために汝が私に与えた試練は、深い苦しみを与えてきました。この苦しみの記憶がわが心を清める助けになりますように」。¹² 一方テイト夫人は、手記を添えて親族にこう書き送っている。

神は、あの苦しみによって、夫がこの世で神のために十分な働きができるように備えてこられたに違いありません。神の摂理によって、私たちの前には新しい人生が広がることになりそうなのです。あなたはきっと私たちに聖なる畏怖を感じるでしょう。¹³

この聖なるイメージに沿って、夫妻は生きていこうとしたのだ。

二十数年後、テイト家を再び悲劇が襲った。猩紅熱を生き延びた一人息子が28歳の若さで病死し、後を追うようにテイト夫人も世を去ったのである。今度はテイト大主教が妻と息子の回想録を書き、妻の手記を含めて一冊の本の形に編纂させ、出版した。そこでは、娘たちの死に夫妻が導き出した意味づけが与えられている。「神は子どもたちを御許に引き取ることが、我々のためなのだとお考えになった。…妻と私を人生の大いなる変化、未知のはるかに大きな仕事のために備えられたのだ」。¹⁴ テイト夫妻の生きざまは、読者にこの言葉を納得させるものであったのだろう。同書は、死と慰めを扱った本として、ヴィクトリア期に最も広く読まれるものとなった。¹⁵

注

- 1 '100 Women 2016: Kokoro — the cancer blog gripping Japan', *BBC News*, 23 Nov. 2016. <http://www.bbc.com/news/magazine-37861457>, accessed 25 July 2017.
- 2 [Catharine Tait,] 'Mrs. Tait's Narrative', in W. M. Benham ed., *Catharine and Craufurd Tait: Wife and Son of Archibald Campbell, Archbishop of Canterbury, A Memoir* (London: Macmillan, 1879), pp. 392-93; Pat Jalland, *Death in the*

Victorian Family (New York: Oxford University Press, 2000), p. 10. テイト家の悲劇については、Georgina Margaret Burrows, 'Images and Perceptions of Wives and Daughters of the Victorian Clergy', D.Phil., Oxford Brookes University, 2002 も参照。

- 3 Tait, *op.cit.*, p. 394.
- 4 'An account of the death of the Bishop of London's children when he was Dean of Carlisle', MS 4497 ff. 392-419.
- 5 Tait, *op.cit.*, pp. 394-95.
- 6 キャサリン・テイトの孫にインタビューをした Ms Georgina Burrows からの情報。この手紙は一族の間に伝わっていたということだが、見つからない。
- 7 Tait, *op.cit.*, pp. 394-95.
- 8 *Ibid.*, pp. 336-65. 感情労働については、例えば A. R. ホックシールド著、石川准・室伏亜希訳『管理される心——感情が商品になるとき』、世界思想社、2000 年を参照。
- 9 Mrs. Wordsworth への手紙。Benham, *op.cit.*, pp. 402-3 からの引用。
- 10 *Ibid.*, pp. 251-53, 408, 410-13.
- 11 1856 年 5 月 8 日の日記。Randall Thomas Davidson and William Benham, *Life of Archibald Campbell Tait, Archbishop of Canterbury* (London: Macmillan, 1891), Vol. 1., p. 190 からの引用；テイト師は 128 頁に及ぶ娘たちの死の記録も執筆した。Jalland, *op.cit.*, p. 128.
- 12 1856 年 9 月 17 日の日記。Davidson and Benham, *op.cit.*, p. 192 から引用。
- 13 Benham, *op.cit.*, pp. 408-9.
- 14 *Ibid.*, pp. 54-56.
- 15 Jalland, *op.cit.*, p. 141. テイト夫人は様々な慈善事業で活躍したが、特に 1866 年のロンドンでのコレラ大流行に際し、遺児のための孤児院設立に尽力したことで知られる。

——大東文化大学教授